

## 随 想

北九州市環境局アジア低炭素化センター  
事業化支援担当課長

フジコー技報22号によせて

本島 直樹

Naoki Motoshima



最近、仕事の関係で海外への出張が非常に多くなった。特にインドネシアへは30回近くも訪問した。訪問前のインドネシアのイメージは、昔のテレビ番組「野生の王国」の印象から、熱帯雨林をオランウータンなどの野生動物が闊歩し、現地人がバンジージャンプをしているというものだった。しかし、初めて訪問した首都ジャカルタは人口1千万人を越え、高層ビルが林立する大都会であった。また、後に北九州市が「環境姉妹都市」を締結するインドネシア第二の都市スラバヤ市も人口約300万人で、横浜市と大阪市の間ぐらいの人が生活する、ここも大都会であった。調べてみると、国の人口は日本の2倍の約2億4千万人いるのだそうだ。

私の“常識”は根底から覆され、世間知らずも甚だしく、かつ大変失礼な話であり、インドネシアの方々には心の中で「失礼しました！ごめんなさい！」と謝ることになったのだ。

ところで私の職場であるアジア低炭素化センター（平成22年6月オープン）のミッションは、市内企業等の環境に質する製品や技術を海外に広めることである。現地にとっては様々な環境問題が改善され、市内企業にはたくさん儲けていただくというものだ。主に北九州市と密接な関係を持つ現地政府に対し、企業が進出しやすい土壌作りの交渉を行う、企業の営業代行というか、商社機能というべきなのか、そういう仕事を行っている。

東南アジアの多くは何処に行っても程度の差はあれ、廃棄物問題と上下水道整備は喫緊の課題であり、その他、エネルギー不足・省エネルギー、エン

ドオブパイプ関連(End of Pipe Technology: 大気、水質、土壌等の末端処理技術)といったニーズが続く。

廃棄物を例にあげると、まず、家庭ではほぼゴミの分別はされておらず、そのまま最終処分場に持ち込まれ、野積みしてお終いである。最終処分場の管理状態も悪く、浸出水がそのまま海や河川にたれ流しということも珍しくない。日本のように家庭で缶・ビン・ペットボトルといった有価物はリサイクルし、残りは焼却して残渣のみを埋め立て処分するといった仕組みは少ない。

エネルギーに目を向けると、インドネシアの場合、石油や天然ガスといった天然資源の宝庫というイメージがあるが、生産量が頭打ちに対して国内消費が増加していることから、2004年以降は純輸入国となっている。この事は以外に知られていない。よって、電気料金は毎年のように値上がりし、IPP (Independent Power Producer: 独立系発電事業)の導入や省エネルギー対策も重要な課題となっているのだ。

例を挙げると枚挙に遑がないが、ようはニーズはそこら中に転がっており、多様な環境関連技術を有する日本の企業であれば解決できることは多い。ただ、問題はコストである。海外では、「日本製は高品質だが高い」という認識が一般的だ。高いのは事実であり、如何に現地のニーズに合わせ、コストを下げるかといったところが求められる。相手のニーズをしっかりと掴みソリューションする、それが日本

の強みであったはずなのだが、最近は徐々にその特徴が薄らいできている事に懸念を禁じえない。

今後、人口の減少が続く日本の内需が大きく改善する見込みは小さく、海外へマーケットを求めていく傾向が一層強まることだろう。もう一度、少し前のガッツのある日本企業が多く現れることに期待したい。

最近、日本企業の技術者が海外の企業に雇われ、技術流出が止まらないといった新聞記事などを目にする。その理由はケースバイケースだが、たびたび感じることは、企業による“戦略的な人材の確保と維持”の欠如と理系出身者の冷遇だと思っている。

前者については、自社の成長戦略に必要な人材の確保は当然必要と考えるだろうが、数年おきにその方針を見直して大きく振れる様では困るし、その度ごとに必要な人材を入れ替えたり首を切られたりしたらたまったものではない。

技術者としては自分が在籍していた企業を支えてきたつもりが、経営者による目先の利益追求により首を切られるとなると、さぞかし辛い思いをするだろう。だから自分の技術を必要としている海外の企業に再就職して、もう一花咲かせたいと気持ちなのだと思う。

彼らや海外企業を非難することは簡単であるが、そもそも会社にとって何が財産なのかを考えず、安易に首切りを続けた経営者の方に問題はないのだろうか。企業にとって、特に技術や製品を売りにしている企業の重要な財産は、間違いなく“技術”そのものであり、またその技術を持つ“技術者”なのだ。

大学で化学を専攻した私は、天文学者になりたかった夢を捨てきれず、ある大学院への進学によってその夢を叶えようと考えていた。しかし、「何のために工学部に来た？ それで飯が食えるか！」の担当教授の一言でその夢を捨て、別の大学院に進学後、教授が勧める石油会社に就職し、自動車会社向けエ

ンジン油の開発を担当した。まだ“バブル”といわれた頃のことである。

実機のエンジンを動かして、エンジン油の評価をするのであるが、車自体も関心を持っていたので、エンジンを分解したり組み立てたり、大変興味深い時を過ごした。同時に自動車会社のニーズ（設計目標）に対して、省燃費性など十分な結果が得られた際にいただいた感謝の言葉は、何ものにも代えがたい喜びであった。私の人生でほんの僅かの期間であったが、ものづくりの楽しさを経験した瞬間であった。きつものづくりを続けている方々も、同じモチベーションで技術に磨きをかけているに違いない。

フジコーさんと出会って早いもので10年以上が過ぎた。平成13年度の溶射温度制御から光触媒への応用開発など。溶射というフジコーさんのコア技術に新しく光触媒が加わり、新技術の確立、新製品の開発と直接・間接的に見てきた。私はフジコーさんの技術開発を支援するという形で、ものづくりに接することができた事にこの場をお借りして感謝したい。今や新工場建設、国内市場への展開、そして海外へと広がろうとしている。溶射技術に光触媒を応用しはじめて10年以上が経った。諦めることなく、研究開発を進めてきた関係者の皆さん、そしてそれを推し進めてきた経営者に僭越ながら敬服したい。

フジコーさんのような企業が革新的な技術開発を今後も進め、将来の日本を強力に牽引していくことを大いに期待している。

**Somewhere, something incredible is waiting to be known.**（「どこかで、信じられない何かが、知られるのを待っている。」アメリカの天文学者 カール・セーガン）